

文樂叢書



菅原傳授手習鑑

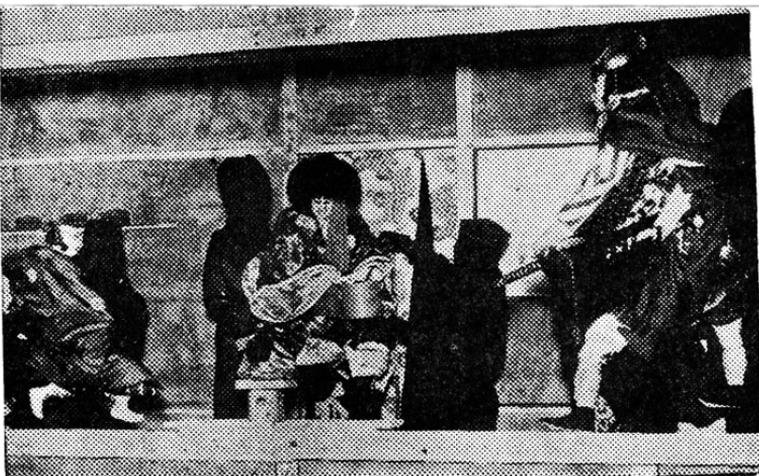
寺子屋の段

3

文樂愛好會編集

床解考  
人形の  
型證說本

1. 「サア實檢せ仕續分せよといふ一言も  
命がけ」松主は三代玉蔵



2. 「六字の囀あらはれ出でしはコハいかに」  
源藏は玉治郎、千代は文五郎



3. 「あさき夢見し心地して」松主は先代榮三、  
千代は文五郎



# 菅原傳授手習鑑寺子屋に就て

## 竹本攝津大掾藝談

此淨るりは延享三年八月竹田出雲が立作者となり並木千柳、三好松洛<sup>(1)</sup><sup>(2)</sup><sup>(3)</sup><sup>(4)</sup>  
竹田小出雲等が手傳つて出來たもので始めて之を語りましたのは竹本島<sup>(5)</sup>  
大夫ださうで御座います。扱寺子屋の場は芝居で致しますと千代が小太<sup>(6)</sup>  
郎を連れて來る處がございますし素淨瑠瑠で「立歸る主の源藏」と云ふ<sup>(7)</sup>  
處も芝居では種々な仕草があるので御座います。淨るりの方では口先だ<sup>(8)</sup>  
けで源藏の心持を示すものですから「常に變りて色青ざめ」と眞直ぐに<sup>(9)</sup>  
語つては何にもなりません。此の「色―青―ざめ」の處に餘程趣がある<sup>(10)</sup>  
ので御座いまして大阪で歿くなりました宗十郎さん又は東京の團十郎、  
菊五郎さん等も苦心した處で御座います。女房との話の間は文の通りで  
別段申上げる程の事も御座いせんが「約束の子が寺入りして居りま

(1) 西曆一七四六年今から約二百十年前

(2) 四段目切寺子屋の段をつくる

(3) 三段目切櫻丸切腹の段をつくる

(4) 二段目切道明寺の段をつくる

(5) 大阪内周防町の人。初名竹本志摩大夫、後、竹本島大夫、豊竹島大夫、二代目豊竹若大夫

(6) 八百屋平右衛門とて青物商賣なりしが、まだ前髪は三つ葉四つ葉の頃よりも筑後ぶしになづみうき身をやつし、商賣片手に一口淨るりを語りし頃は、まだ青海苔やわぶか淨るりの節なしなるが(浪花蘆)後「優艶絶妙音聲無類」(竹豊故事)の大夫になる

(7) この時紋下筑前縁は大序と三段目政大夫が道明寺の切と天拜山、島大夫が杖折檻、東天紅と寺子屋を語る。

(8) 色でグット息をつめたま、一度切り青ざめと別に云つてこの一句にふりかゝつた主君の一大事を苦惱する源藏の蒼白な面持を勞させる

(9) 中村宗十郎(天保六年生

す。」の件りに「母御が連れて見えました」と云ふ事は丸本には御座い  
 ませんけれど之を云ひませんと小太郎一人で来たやうにもなりますし  
 又後に「シテ其の連れて来た母御は何處」と云ふ文句に會ひませんから  
 夫れで此の一句を加へたので御座います。又御師匠様今から御頼み申し  
 ます。」と小太郎が云ふ迄は思案に沈んで居りまして、此の小太郎の行  
 儀と云ひ言葉附きと云ひ山家育ちの子供ではないと思はす小太郎の顔を  
 見て急に機嫌が替つて、此處で之を御身替りと思ひ附いて「公家高家の  
 御子息」云々の詞が出るので夫で女房が「最初の顔附きと云ひ、今又彼  
 の子を見て」となるので御座います。此處から「松王と云ふ奴は三つ兒  
 の中の一方の悪者云々」の間は別に細かい節は御座いませけれど詞の  
 中に源藏の苦心の程を示すので御座います。「せまじき者は宮仕へ」を  
 芝居では仕たり抜いたり致しますが淨るりでは此處にギンウケの節が附  
 いて居ります。夫から百姓が大勢出て参りましてから松王が「彼等と  
 て油断はならぬ―菅秀才の首見知りし者なき故」の處は芝居では主に源

れ一明治廿二年歿五十五才  
 (8) 九代目團十郎(天保九年  
 生れ一明治卅六年歿六六才)  
 (9) 五代目菊五郎(天保十四  
 年生れ一明治卅六年歿六十才)

(10) 「屹度見るより暫くは」  
 で源藏がモウ身代りと思付く  
 から駄目になるのである。コ  
 ンナ所の源藏は太夫も大事を  
 取つて腹に持てるだけ持たね  
 ばならぬ。即ち太夫の腹力の  
 見える大事の所である。「暫  
 くは打守り」のスエテが四段  
 目のスエテである。夫から「  
 忽ち面色和らぎ」でモウ身代  
 りと思付く、夫がマダ行かぬ  
 其の弱身を遁るゝにはマダ疑  
 の心を以て「忽ち面色」と云  
 うて「和ぎ」を一中にさへ  
 ソーッと語ればマダ持つて行  
 かれるものである。「ム、器  
 置すぐれて氣高い生付、公家  
 高家の御子息と云うても恐ら  
 く辱しからず、と軽く獨言  
 に語つてこゝで息がとまつて  
 「ラ、ハテ扱て、ソナタは、  
 マ……よい子ぢやノウ」と長  
 門太夫が語つた時その息組み  
 に見物も引倒される程驚いた  
 (其日庵)

藏夫婦が一度奥へ這入つて了ひますが茲は源藏夫婦にも聞かす詞で御座いますから舞臺に居て貰はないと工合が悪いので御座います。又百姓の呼出しは臨機應變で御座いまして此處は口拍子ですから間拍子さへ旨く行けば好いので御座います。芝居では「奥にはバツサリ首斬る音」の處等は松王も玄蕃も戸浪も夫々仕種が御座いますけれど淨りの方では足取り丈で御座いましてマア「ハツと女房胸を抱き」の處が大切で御座います。「是非に及ばず菅秀才の御首討奉つて御座ります」は悄悄とした處を示し、又松王が首桶に手を掛ける時「イヤ言はゞ大切な御首」と松王に念を押す處は源藏が贗首を持出した心中を示すので御座います。夫から「堅唾を呑んで……ウムフヘアハ」の笑ひを別けて笑ふ人が御座います。私は此處の松王の笑ひは近江源氏の頼政又は八陣の船の正清等の笑ひと違ひ自分の子を討つたかどうかと云ふ處で俗に苦笑ひと云ふのですから高々とは笑ひませんので御座います。夫から昔の長門太夫は聲がありました爲めに地獄極樂の境を押して直ぐに氣を替へて「家來衆源

(11) 先生方のいつもやかましく仰有る始めの「御宮仕へはこゝちやわい」をやめて本文通り「せまじきものは宮仕へぢやなア」と元へ戻しました處大變なお賞めに預りました(吉右衛門自傳)  
源藏夫婦が主持ちの身の果敢なき、切なきを泌々と感じてゐるように抒情風に氣分をこめて語るところ  
(12) 山城少椽は「こんな所で松王が肚を割つてしまつては面白くない。何の深い意味をもたせずスラリと眞直ぐに語りすてゐる」  
(13) この邊から首實檢のすむまでは呼吸一つ入れられない緊張した太夫の苦しい所、太夫も三味線も命がけの苦しみに  
(14) こゝから武部源藏白台にまでが最も骨の折れる所、「踏ん込む足もけしむ内」の内の語尾のチで息をくつと肚一杯の力でつめて武部源藏白台にと一息につゞける。も源藏で切ると淨りや氣が抜けて死んでしまふ。  
(15) この邊一句一句にも全部イキが詰つていて寸分の隙も與えられぬ、この邊で一ヶ所でもイキが抜けるとその寺子

藏夫婦を取巻き召され」と軽く言つたので此處をヤマとして居りましたし私の師匠も此處を殊に表おもてを用ゐて居つたので御座います。次に「サア實檢せよ見分せよー早や抜き掛けるト天道様、佛神様」の間は最も源藏夫婦の心中を表はすので御座いますが此の先のためつ、すがめつー菅秀才の首に紛れなしー云ふに夫婦はひつくりきよとく、迄五行本三枚の間が此の淨るりの最も眼目なので御座います。夫婦は此處で一先づ安心して夫から千代が戻つて来て又一つの苦心千代が「ソソなら連れて歸りませう」は小太郎を討つて呉れたか何うかと半信半疑である處で、三味線と太夫とが呼吸で利かす處で御座います。文樂座で四十日、五十日續けてやつて居る間にも其の日其の日の出来不出来がある位で御座いますのに況して毎日替るのですから思ふやうには呼吸の合はないのも無理は御座いけません。夫から松王が這入つて来て大小を拔出した處は芝居と同様で御座いますが松王が「彼の逃げ隠れも致さずに一潔う首差伸べて」の件りの笑ひが後段での山で其他は段切のいろは送りなので御座います

屋はもう形が崩れてしまう。  
〔16〕「眼力光らず松王が、息をつめて三味線がトーンと来るのを待つて「ウム、コリヤ菅秀才の首討つたは」と續けるのであるが、このトーンを待つまでが非常に苦しく先代清六の弾くトーンが待ちきれず望息するようになるので思わす息を外すと清六はエイツとばかり怒氣を含んだ掛聲で撥をおろすのが客にもわかる恥しさ」(山城少様)

〔17〕「最後に松王の泣き笑ひでございますが、私は「イヤなに源藏殿」を世話に倅けて申し、續いて「定めて最後の節、未練な死を致したでござらうな」の「致した」をイタシタと切つて如何にも松王が我が子の死の様子を不安氣に源藏に向つて尋ねてゐる風に語り、次の「アノ逃げかくれも致さずにな」の「逃げ隠れも」までを思はず急ぎ込んでいふ、フト我に返つて「致さずにイイいな」と深慮深く源藏に駄目を押すやうな調子でやつてをります。これに對し源藏の「につこりと笑うて」は松王への同情に堪へかねた

解説 菅原傳授手習鑑は道眞左遷の史實や傳説によつたもので近松門左衛門の「天神記」に負う所が多いが、單なる改作、翻案でなく三人三様の親子の別れを見せた道明寺の段、佐太村の段、寺子屋の段など獨創的な趣向を展開しています。左に組織を一覽表に示します。

初段 大序、大内の段 (渤海國使天關敬來朝、時平天子に代らうとし道眞にとめられる)

口、加茂堤の段 (帝の御齒平應祈願に齊世親王社參。櫻丸と八重、親王と刈屋姫との戀をとりもつ。)

切、筆法傳授の段 (希世は筆法傳授はうけられず勸當されて、た武部源藏がうける。參内せんとして道眞の冠が落ちる。)

跡、築地の段 (道眞は謀叛と言立てられ遠島としまる。源藏夫婦は菅秀才をぬすみ出す。)

二段目、道行詞の甘替 (櫻丸は飴賣に身をやつして親王、刈屋姫を荷箱にかくして安居の濱へ。)

口、汐待の段 (安居の濱の船待。輝國の情で道眞は伯母賢壽の許へ行くを許される。)

切、道明寺の段 (覺譯の刈屋姫を杖折檻、宿彌太郎土師兵衛偽迎の東天紅、木像の奇瑞、水相名残。)

三段目 口、車曳の段 (土手並木、梅王、櫻丸、時平の吉田參籠を襲い松王と争う。)

切、佐太村の段 (嫁の千代、春、八重と茶筌酒の白太夫、梅王、松王の喧嘩、訴訟、櫻丸の切腹。)

四段目 口、配所、天拜山の段 (安樂寺飛梅の奇瑞、時平の陰謀、菅公、雷となり都に飛去る。)

態で十分に愁をこめて泣き乍ら申し、それを受けて松王はウムと込みあげて来る悲しみを一度堪らへてからハハハハと空虚な笑ひを見せ、最後に低く仄かに泣き落すやうに致してをります。先代大隅太夫のこのハハハハハハの間はとも丁寧で長うございまして」(山口廣「文樂の鑑賞」)

(18) 全く三味線と人形の持場太夫はたゞそれに騙子をあわせて美しく唄えばよい

# 目 次

解 説 ..... 1  
 寺子屋に就て ..... 2~6  
 床 本 ..... 7~45  
 カシラ、衣裳 ..... 46  
 舞台装置、小道具 ..... 47  
 刊 行 書 目 ..... 48

## 文 樂 愛 好 會 同 人

|                   |               |                   |                   |
|-------------------|---------------|-------------------|-------------------|
| 高 齋 荻 安 吉 三 石 大 近 | 安 原 永 村 井 西 石 | 六 二 三 仙 孝 幸 常 重 泰 | 郎 郎 治 三 雄 一 彦 孝 秋 |
|-------------------|---------------|-------------------|-------------------|

編 集 ・ 吉 齋 永 齋 永 齋 二 郎

五 段 目 大 内 の 段  
 中 北 嵯 峨 隱 家 の 段  
 切 寺 子 屋 の 段

（時平方襲來御台を殺さんとし八重は防いで死し、山伏が御台を奪去る。）  
 （寺入。首實檢。愁嘆。いろは送り。詳細は本文。）  
 （時平一味は齊世親王、刈屋姫、菅秀才を襲うが雷の爲、希世清行は死に櫻丸、八重は時平を殺す。菅秀才は菅家を相続する。）

(舞台) 京都郊外鴨籠村牛生里。

もと菅公の家臣武部源藏の浪宅。手習指扇の寺子屋。本手いつもの所に居体。正面下手に暖簾をかけた納戸口。その上手床の間、天照皇大神宮の掛軸。巻物をのせた三寶、左右に對の禰。次に押入。上手の間へは斜に四枚の障子で仕切る。納戸口の下手壁。重ねた黒塗机をかく。下手居体。に續く壁に書道指扇の掛額。(寺入) 口。源藏戻りから切になる。

★幕があくとツメの寺子が納戸

口から出て机の前で字を書く菅秀才は離れて上手に坐る。ひとときわ大きいよだれくりがへへのもへのを書き見せつゝいたり机を動かしたりいたすら始める。

(1) 一字の價が千金にも二千金にも當る事で文章や筆蹟をほめた言葉。史記に呂不韋が春秋を作つて一字の添削をしたものに千金をかけた故事。

(2) 廣い世界。先代萩に三千世界に子を持つた親の心は皆一つ。

(3) 邊鄙な山里の家

(4) 大原の西と真船の奥と二説がある。

## 本文

一字千金、二千金、<sup>(1)</sup>フシ三千世界の、宝ぞと、

教へる人に習ふ子の中に交る菅秀才、<sup>(2)</sup>武部源藏

夫婦の者いたはり傳き我が子ぞと、人目に見せ

て片山家、<sup>(3)</sup>スエテ<sup>(4)</sup>芹生の里へ所替、子供集めて読書

の器用不器用清書を、顔に書く子と手に書くと

人形書く子は天窓搔く、<sup>(5)</sup>教ゆる人は取分けて、

フシ世話をかくとぞ見えにける、<sup>(6)</sup>地中に年かさ五

(5) 人形の落書する子は叱られて頭をかき、先生は世話がやけることだ。

(6) 十五にもなつて涎をたれる愚鈍な子。守子の内この人形だけ三人遣。

(7) 舊暦では一月は卅日、一年は三百六十日。

(8) 早熟。年のわりに大人びている。

(9) 嘲戯、ちよける。ふざける。

(10) 歪める。いじめる。ひどい目にあわす。

(11) めいぐ文鎮もつて。今は草紙で叩きあう。

(12) ひいきする。

(13) 書道の神標道眞公の血をひいて、威嚴懿望の爲である。

作が息子コレ見な是見や、詞お師匠様の留主るすの

間に手習ひするは大きな損、おりや坊主天窓あたまの

清書きよがきしたと、地見せるは十五(6)の涎よたれくり若君はお

となしく、詞一日に一字学べば三百六十字(7)との

教、そんな事書かず共本ともほんの清書したがよいと、

地八つに成る子に呵しかられて、ませよ(8)くと指ゆびざ

して、(9)フシ(9)てうげかゝるを残りの子供、兄弟子に

口過すひす涎よたれくりめをい(10)がめてやると、(11)手(11)でに庄ひ

尺振廻さんす自然じねん天然肩持(12)つも、(13)傳(13)ふる筆の威徳

★戸浪、鶯色石持黒縷子帯腰懸から現われる。

(14) うとまし、嫌な事だ、好ましくない。

(15) 響應に招かれて行かれたので何時歸られるか分らぬ。

(16) 新入生。

(17) いろはにと平仮名の手本をよむ者、此中とは往來物や一筆啓上(一筆申上げます)と消息文をよむものやかまし事々。

(18) 申し上げ候の候から候べくとつづけ、可助、可内と武家の仲間小者にかける。

(19) 細長い重箱と書物を入れる手箱。

(20) 利口發明、かしこい。

★下手ひき幕から千代(黒縮緬茶金の帯)が小太郎(水淺黄のしめ中振袖、胴着赤襟、羽織袴揃)下男をつれて登場屋台に入る。

かや、地あるじ主の女房、★奥より立出で、詞又こりや例

の鬭諍いさかひかおとましやく、けふに限つて連合つれあひの

源藏殿、(15)振舞にいてなれば戻りも知れぬ、ほん

にくこなた衆で一時の間も待兼る、けふは取

分け寺入(16)も有る筈、ひる晝からは休やすます程に、皆精出せい

して習ならたく、地ソリヤ又嬉やすみしや休やすみぢやと、ハツミ

筆より先きに読よむ声高く、詞(17)いろはに、此中は

御人被下おんくたされ、地(18)一筆啓上、候いっぴつべくの、ハルフシ男が(20)か

たに堺重(19)、ぶんこ文庫机をになはせて、小オクリ利(20)発、ら

★上手より菅秀才さがつて寺子  
達、戸浪千代、下手に小太郎

(21) アイく(はいく)それ  
ならばと愛嬌たつぷりの挨拶  
ぶり千本櫻に「前垂はやく  
と愛に愛もつ鮎の鮎」

(22) 身分卑しい事、吹けばと  
ぶくらし。

しき女房の七つ斗ばかりな子を連れて、頼みませうと  
云ひいる、内にもそれと早悟はやさとりこちへおはいり  
遊ばせと、いふもとやかアイく(21)と愛に愛持あい  
つ女同士どし、フシ來た女房は猶笑顔まがほ、詞私事は此村  
はづれに、軽(22)う暮してをる者で御ざりまする、  
此わんぱく者をお世話なされて下さりよかと、  
お尋ね申しにおこしましたれば、おこせ世話し  
てやると結構なお詞にあまえ、早速連れて参じ  
ました、うちかた内方にも、御子息様がござりますげな

★戸浪が菅秀才を我が子として紹介すると菅秀才は戸浪の傍に来て千代に両手をついて挨拶しものと席につく。

(23) 大變な骨折り。

★千代は小太郎に扇でたゝみを軽く叩いて挨拶するよう注意する。

(24) 氣品のある。

が、どのお子でござりますぞ、★アイ是が源藏殿の跡とりでござります、コレハコレハよいお子様や、外にも大勢の子達(23)いかいお世話で御ざりましよ、アイ御推量をされて下さりませ、シテ寺入は此お子で御ざりますか、名は何と申します、★アイ小太郎と申しまして、わんぱく者でござります、イ、ヤイヤ、(24)氣高いよいお子や、折悪うけふは連合源藏も、振舞に参られました、是はマアお留主すかいな、お待遠わたしなら私が呼びに

★三助ちよつと居眠りしていたがびつくりして目を覺まし机をさかさにして文庫をのせ庭先から正面中央におく。

(25) へぎ折敷、へぎ板の盆。

(26) 心遣に及ばぬ。

(27) お恥しいことですがの文字詞、湯もじ、かもじ、すもじの類。

(28) 土産と披露して分け、紹介して

(29) 饅頭、赤御飯とこんにやく、椎茸の醤油煮

(30) 一つく、精撰した椎茸

(31) 奔走子、秘蔵子、

★よだれくりがそつと堺重をあけてつまみぐいをして戸浪に吐られる。

まゐりましよ、いえく幸ひ私も参つてくる所

が有れば、其内にはお帰りでござりませう、コ★

レ三助、其持つて來た物あなたの傍へ上げませ、

アツト、地こたへて堺重さかひぢう(25)へぎのせ櫃に乗たる一包、ひとつみフシ内

儀の傍へ指出す、詞是はまあく(26)いはれぬ事を、

イヤお(27)はもじながら此子が参つた印、しるし此堺重は

子達への土産、みやげ(28)取弘めて下さりませといはねとりひろ

どしれし(29)蒸物煮染、我子に世話を焼豆腐、つぶ(30)

椎茸の入たるは、フシほんそ子とこそ見えにけれ、(31)

★そばへ引よせてかなしみをかくしてやさしく言いさかす

(32) 度にすぎて跳ねまわる、いたずら

(33) 粟標、内儀標

★吐り乍らもだしめなき、戸浪に氣づいて一寸わらつて

(34) 聞き分けがない

(35) 道理よな、尤です

詞 是はマア何から何迄取揃へて御念の入つた事、

地 戻られたら見せませう、  
詞 イヤモほんの心斗はかり

宜しうお頼申上げます、  
★ コレ小太郎、ちよつと

隣村迄となりいっている程に、おとなしうして待つて居

や、悪(32)あがきせまいぞ、  
御内證様往(33)てさんじま

しよと、  
地 表おもてへ出ればかゝ様わしも行きたいと。

縫すがり付くを振放し、  
★ 詞 嗜たしなめよ、  
大きな形なりして跡追

ふのか、御らうじませまだ頑(34)是が御ざりませぬ

ソリヤ道理(35)いなドリヤをばがよい物やりましよ、

(36) すく

★小太郎に氣をとられて三助に  
つきあたり三助を叱りつけて  
氣をかえ、扇をバツとひら  
てかるくあふぎ乍ら下手に入  
る、三助従う

★切場

★うでぐみをして下手から現わ  
れ一旦トンと正面向いてから  
右足を前に出して右肩をひい  
て上手を見返りうしろむくと  
すく門口に行き、「内入悪く  
」で右足かけ体を前にして子  
供達を見廻し正面中央に出  
「役に立たず」で坐る。戸浪は  
下手より夫に向う

(1) 機嫌わるく家の中に這入  
り

(2) 血統素性より教育や境遇  
が人柄に影響が多いという諺

(3) 田舎育ち

地<sup>(36)</sup> つい戻つてやらんせと、目でしらすればアイ

くついちよつと一走<sup>はしり</sup>と、跡追ふ子にもひかさ

る、振返り見返りて、オクリ<sup>しもべ</sup>下部

★へ引連れ急ぎ行く、地<sup>地</sup>どりやこちの子と近付<sup>ちかづき</sup>に

と若君の傍へ寄せ、機嫌紛らす折からに、立帰

る主の源藏常に変わりて色青ざめ、内入悪く子供<sup>(1)</sup>

を見廻し、詞エ、氏より育ち<sup>(2)</sup>といふに、繁華の

地と違ひ、いづれを見ても山家育ち<sup>(3)</sup>、世話がひ

もなき役に立たずと、地<sup>地</sup>フシ 思ひ有りげに見えけ

(4) 合點がいかず、心配で

(5) 酒のため

(6) 憎体口、にくまれ口は人聞もわるい

(7) 恥しい、つらい、困る

★のれんをあげて小太郎の手をひきそばへゆく

(8) 可憐、かわいらしく

★顔をあげて見返りじつと見つめ(眉上げ)首を靜かに廻して上手の若君を見返つてハツとし又首をひねつて小太郎を見、きつと眉をあげる。(9) じつと、動かす、

れば、<sup>(4)</sup>心ならず女房立寄り、<sup>詞</sup>いつにない顔

色もわるし、<sup>(5)</sup>振舞のさゝ機嫌かはしらぬが、山

家育<sup>そた</sup>ちは知れて有る子供、<sup>(6)</sup>にくて口は聞えも悪<sup>わる</sup>

い、殊にけふは約束の子が寺入して居まする、

地<sup>さがな</sup>悪<sup>(7)</sup>い人と思ふも氣の毒、機嫌直して逢うてや

つて下されと、★小太郎連れて引合せど指<sup>さし</sup>うつむ

いて思案<sup>しあん</sup>の体、<sup>(8)</sup>幼氣<sup>いたいけ</sup>に手をつかへ、<sup>詞</sup>お師匠様

今から頼上げますと、<sup>地</sup>云<sup>★</sup>ふに思はずふりあふ

のき急度<sup>(9)</sup>見るより暫くは、<sup>スエテ</sup>打守り居たりし

(10) 顔色

(11) 才智から轉じてみめ、かたち

(12) 武家に對して堂上方

(13) 歴々の武家

★そばにより兩手をそえそなたはハ……と大きく笑いよい子ぢやなアと背をさすつてやる

(14) 占いの上位、歌舞伎役者位附の高位。こゝではとびきりよいこと

(15) 母親

★ウームウーム、ウ……とうなづいて兩手をひざにきつとなつて大極上と云う

(16) 位附の最高位、上々吉より

が、たちまち(10)面しよくやはらぎ、詞扱々(11)器量勝たか

れてけだかい生れ付き、(12)公家高家の御子息とい

うてもおそらく恥しからず、★ハテ扱そなたはよ

い子ぢやなうと、地機嫌直れば女房も、詞何と

よい子よい弟子で、御さんしよが、よい共よい

共上々吉、(14)シテ其その連れて來たお袋(15)はいづくに、

サお前の留主なら其間に隣村となり迄いて來こというて、

★それ夫もよし(16)く大極上、先づ子供と奥ハやり

機嫌よう遊ばしめされ、それ夫皆お暇が出た、小太

★原藏はほつとしてはじめて羽織をぬぎ袴をとる、こゝで戸浪と二人切りになる

(17) 顔付

(18) わけがある

★いすまいを直してきつと兩手をひざにおき下手の戸浪に向

(19) 村の長

(20) 左大臣藤原時平

(21) 右大臣菅原道真

★山城は「や、こいイイつ」おつとりまアアき」と殊更に力を入れて語らずどこ迄も夫婦の密談らしく、内輪にひそひそと語る。

(22) 病氣でもうろくする。

(23) 首の眞偽を見分ける役

郎とも俱ともに奥へ奥へと、地★若君諸共いざなは誘いざなせ、フシ跡先見

廻し夫に向ひ、詞最前の顔色は常ならぬ氣相、(17) きっかけ

合点の行かぬと思つた所に、今又あの子を見て

打つてかへての機嫌顔、地猶以て合点行かずと

うやら様子(18)が有りさうな、氣遣ひを聞してと問

へば源藏、詞ホ、ウ氣遣ひな筈、今日村の饗應もてなし

と偽り某いづはを庄屋の方へ呼付け、(20)時平が家來春藤

玄蕃、今一人は菅丞相(21)の御恩をきながら、時平

に隨ふ松王丸、★(22)やみほうけ(23)病耄ながら檢分の役と見

(24) ふみ込み

★肩をあげてきつとなつてゆすり、是非に及ばずでうなだれて「打つて渡さう」で両手をつき「と請合うた」で女房がおどろきそばによるのを「サア心は」と右手でとめる

(25) 退き引き、動きがとれぬ進退窮まる

(26) きびしく責める、うむを云わさぬ詮議

(27) 玉で飾つたすだれ、高貴な家

(28) 出入口にこもをたれた乞食小屋

(29) 詮ずる所、結局、遂に、★上手を向いて両手をついてハラ／＼と首ふるわし頭をさげるので戸浪も顔を抑えて泣く

え数百人にて追つ取巻き、汝が方に菅相丞の一

子菅秀才、我子として匿かくまふ由訴そん人有つて明白、

急ぎ首打つて出すや否いなや、但し(24)ふん込み請取ら

うや、返答いかにとのつ引ならぬ手詰づめ、是非に

及ばず首討つて渡さうと請合うた心は、数多有あまた

る寺子の内、いづれ成り共身がはりと思うて帰

る道すがら、あれか是かと指折ゆびつても、玉簾(72)の

中の誕生と、薦垂(28)の中で育つたとは似ても似付

かず、所詮御運の末成るかいたはしや浅間しや

★右手を廻し左手を廻し「天道のひかへ」でトンと右ひさを前に出して右上を見あげ  
(30)牛羊の屠殺所にひいていられる時のごとく進みかねる  
(31)加護、おまもり  
(32)まさか、黒を白と云うような無茶苦茶ないんちきでない。あまりくいちがいのない容貌

(33)河内道明寺、菅公の伯母覺壽の居所

★右手で前をさしマユをあげてきつとし

(34)一か八か、のるかそるか

(35)顔形

と、<sup>★(30)</sup>屠所あゆの歩みで帰りしが天道(31)のひかへつよ

きにや、<sup>詞</sup>あの寺入の子を見れば、<sup>(32)</sup>まんざら烏

を鷲共いはれぬ器量、<sup>地</sup>一旦身がはりで<sup>あざむ</sup>欺き此

場さへ<sup>のが</sup>遁れたらば、<sup>すな(33)</sup>直に河内へお供する思案、

★今暫くが大事の場所と語れば女房待たんせや、

<sup>詞</sup>其松王といふやつは三つ子の内の悪者、若君

の顔はよう見知つて居るぞえ、<sup>(34)</sup>サアそこが一か

ばちか、<sup>いき</sup>生顔と死顔(35)は相顔さうがうのかはる物、<sup>おも</sup>面ざし

似たる小太郎が首よもや<sup>にせ</sup>質とは思ふまじ、よし

★左に刀とり前に出して右手つかに手をかけ

(36) 冥途への途中にあると云う死出の山と三途の川あの世への旅の供

★上手を向いて右手をあごの下におき左手をそえて考える

(37) ちよつこり、口巧みに

(38) 手段、方法

(39) 場合によつたら親子一緒に殺そう

★上手を向くと刀をもち眉をあげるのでエ、イと戸浪は右手つき左手をあげておどろくのをコリヤやいとめる

又夫それと顯はれたらば松王まつめを眞ま二つ、残る奴原やつばら

切つて捨て、叶はぬ時は若君諸共、死出(36)三途さんずの

御供と胸を据ゑたが一つの難儀、今にも小太郎

が母親迎ひに來たらば何とせん、地此儀★に当惑

指当つたは此難儀、詞イヤ其事は氣遣ひ有るな、

女子をなご同士の口先で(37)ちよぼくさだまして見よ、イ

ヤ其手(38)では行くまい、大事は小事より顯はるゝ、

事(39)によつたら母諸共、エ、イ、こりややい、若

君には替られぬお主の爲を辨へよと、地いふに

(40) 覺悟をきめ  
★立上つて顔を見ずに、そのま  
より添い顔を見あわせハッ  
トそむけてそのまゝうなだれ  
ると戸浪は坐つて手拭で顔を  
抑える

「母御の因果かと」戸浪は泣  
き、淋しく源藏が報いはち  
が火の車」と云うと思わず夫  
の傍により「追付け廻つて來  
ませう」と見上げると戸浪を  
見かえり眉をあげてハラ／＼  
となる

(41) 小さな弟子、子供の弟子  
(42) 宿世の業、前世からの運  
命、悲運

(43) 前世の悪業の報い、不運  
(44) 鬼が罪人をのせる火焰の

車  
(45) 仕官奉公などすれば自由  
を束縛されたり主人の爲命も  
すてなければならぬから

★源藏は羽織を両手にひろげも  
つてさげがたりと身をふる  
るわし首ひねり廻し、戸浪と  
顔をあわせトシと戸浪は身を  
ひいて泣くずれる

★下手横幕から茶籠子の大紋で  
股立とつた春藤玄蕃が右に中  
啓を持つて現われる  
つゞいてツメの奴乗物を昇い  
でくる

(40) 胸するさうでござんす、氣弱うては仕損ぜん、

鬼に成つてと夫婦はつつ立ち、互に顔を見合せ

て、弟子子といへば我子も同然、サけふに限つ

て寺入したはあの子が業か母御の因果か、報い

はこちが火の車、追付け廻つて來ませうと、

妻が歎けば夫も目をすり、せまじき物は宮仕へ

と、スエテ俱に、涙にくれ居たる、地かゝる所へ

春藤玄蕃首見る役は松王丸、病苦を助くる駕乗

物、フシ門口に鼻据ゆれば、地跡には大勢村の者

戸浪が外を窺つてから戸を締  
め源藏の傍にもどつてさゝや  
く源藏は戸浪を納戸へ忍ばせ  
て戸口に進み耳を傾ける

★玄蕃正面になる

★太刀の束頭がかごの向うに高  
く突出されツメの奴が棒鼻を  
かき上げると松王丸がかごの  
向う側に立上る

つきしたが  
附随うて申上げます、詞 皆是にをる者の子供が  
手習に参つてをります、若取違へ首討れては取  
返しが成りませぬ、どうぞお戻し下されと、地  
願へば玄蕃ヤアかしましい蠅虫めら、詞 うぬら  
が忤がきの事迄身共が知つた事か、勝手次第に連れ  
うせうと、★ 地 呵しかりつく付れば松王丸★ヤレお待ちなされ  
暫くと、かご 駕より出るも 刀を杖、詞 憚りながら彼  
等迎とても油断はならぬ、病中ながら拙者めが檢分  
の役勤つとむるも、外に菅秀才の顔見しりし者なき

★「有難き」で右の手の掌を  
開いて辭儀をし  
★「陳かには」で一寸玄蕃の方  
を見てブホン／＼と咳きつゞ  
けて胸をかるく打ち「ク、  
」と苦しんで「ア、」と面を  
あげて「イヤ致されず」と左  
についた太刀へ倚りかゝつて  
玄蕃を見る  
(1) 共謀、一つになつて悪事  
を企てる  
(2) 手段、やり口  
★トんと左足から正面になり下  
手にのこした顔も正面に戻し  
て右ひざをあげてからトんと  
下す  
そして松王と玄蕃と互に一禮  
して本手戸口に進み上手から  
玄蕃、松王の順で床机にかけ  
た形でやゝ上手斜になり松王  
は右手に大刀を斜にもつ  
(3) 一寸のすきもない、水も  
洩らさぬ用心さ  
(4) 事を分けて言つたらきゝ  
めがあれ、のみ込め、こゝは  
すばりと稱い所を云われてび  
んとくる  
(5) 師匠の心中も知らぬとか  
ける

故、今日の役日仕了すれば、病身の願ひ、御暇

下さるべしと、有難き御意の趣疎には致されず、

菅丞相の所縁ゆかりの者此村に置くからは、百姓共も

ぐる(1)になつて、銘々が躬せがれに仕立て助けて帰る手(2)

も有る事、コリヤやい百姓めら、ざわ／＼とぬ

かさず共一人宛呼出せ、面改めて戻してくりよ

と、地のつ引させぬ釘鏝(3)、打てばひゞけの内には

夫婦、豫て覚悟も今更に、フシ胸轟かす斗り也。

地 表は夫共(5)白髮の親仁門口より声高に、長松よ

★松王は走つて出る子供に注意  
深い目を注ぎ、玄蕃が中啓で  
顎を支えて松王を顧ると違う  
と云う心で首をふる

(6) はしりごつこ、競走、け  
んけんにあらず

(7) 頭の眞上に髪を結つて結  
んだ日やけの顔が小さな秋茄  
子そつくり

(8) 蔭、秋茄子嫁に食わずな  
と嫁にもいじらせぬ大事の孫  
(9) 花がおちると實がならぬ  
ことと危く殺されることが助  
かつたこととかける

くと呼出せば、ヲツト答へて出てくるは腕白★  
顔に墨べつたり、似ても似付かぬ雪と墨是では  
ないと赦しやる、詞 岩松は居ぬかと呼声よぶに、地  
祖父様ぢさま何ぢやとはし(6)ごくで、出でくる子供の頑  
是なき、顔は丸顔、(7)木みしり茄子なすび、詮議に及  
ばぬ連れうせうと睨にらみ付けられヲ怖や、詞嫁(8)にも  
くはさぬ此孫を命の花(9)落遁れしと、地祖父ぢいが  
抱へて走はしり行く、地次は十五の涎よたれくりぼんよく  
と親父が手招まねき、詞とよおれはもう爰たかれから懐

★誕くりには玄蕃はそつばを向

く(或は中啓で頭を叩く)  
よだれをふいてやつて親父が  
背負うと前へひつくり返るの  
で自分の背をさして父を背負  
うて歸るおかしさ

(10) 歸ろう

(11) 長い顔にこほろぎのよう  
な細い聲でうすのろ姿が目  
に見える

(12) 猫が好物の魚をくわえて  
にげるように猫なで聲の甘い  
親が連れて歸る

★きくつとなり、左の大刀の東  
頭に右手をかけて露を子供  
の右首筋にかけると玄蕃も中啓  
を突出して同時にきつとなる

松王は身体を右に左に傾けて  
見首をふつて鑑ではねる

(13) うさんくさい、怪しい  
★續いて三人の子供が出るがそ  
の都度玄蕃は中啓で子供の額  
を支え、松王を顧みるが松王

は軽く首をふるのみ  
(14) 土百姓が産ましたろくで  
なしの子供の中から自分の子  
をさがして連れてゆくことと

百匁いくらの計芋はおいしそ  
うな子芋ばかりよつて買う市  
井の習慣とをかける

(15) 胸を据える、覺悟をきめ  
る

(10) ていのと、地★あまえる顔は馬顔で、(11) 声まりざりす 蒼子泣く

な、抱いてやらうと干鮭を、(12) 猫なで、フシ 親がく

はへ行く、詞 私せがれが世倅は器量よしお見違へ下さ

るなど、地 断ことわりいうて呼出すは、色白々と瓜實顔

こいつ(13) 胡乱うろんと引捕へ、見れば首筋眞黒々墨か

あざかは知らね共、こいつでないと突放す、其

外山家奥在所の子供残らず呼出して、見せても

く似ぬこそ道理土(14)が産うました計芋、フシ 子斗はかりよつ

て立帰る、地★スハ身の上と源藏も妻の戸浪も(15) 胴

★源藏は上手障子をあけて現われ、戸浪は納戸口から出て兩人下手で平伏する

★玄蕃を先に松王丸は厚体に入り、源藏夫婦の前を通つて松王は中央左に刀をもつて坐り玄蕃はその上手で床にかけた形で正面になる

ツメ人形の捕手が船底から玄蕃の上手に首桶をおく

★源藏が左に刀をもつて立上ろうとする、松王は源藏の方へ首をひねつて見据えていう

★左手に握つた太刀を前に横にして出して右肩をひいて眺め

★首を左から廻して「夕所もない」と反り身になつてトんと極る、「が又生顔と死顔は」

右手を開いて前に出して「手首をふつてから」相好が變る」とそのまゝ源藏を見やつて手をおろし「なハ、ハ、どと

と」右を前に出して右へ流し、首を右手と一緒にふつて「それもたべぬ」と筆を開いた右手を右に拂つて顔を上手へそむけ「古手な事して後悔すな

と」反り身になつてやゝ仰向けた顔を鋭くふる

(16) 食わぬ、そんな手にのら(17) 古くさい手段、かびのは

を据ゑ、待つ間程なく入來る兩人、詞ヤア源藏、

此玄蕃が目の前で討つて渡そと請合うた、菅秀

才が首サア請取う、地早く渡せと手詰の催促ち

つ共臆せず、詞仮初ならぬ右大臣の若君、搔首

捻首ねぢくびにも致されず、地暫くは御容赦と立上るを

松王丸、詞ヤア其手は食はぬ、暫しの用捨と隙

どらせ逃支度にひしても、裏道うらみちへは数百人を付置き

蟻ありの這出る所もない、生顔なまがほと死顔は相好さうがうが變る

などと、身替りの贗首にせ夫もたべぬ、地古手ふるてな事

えたり口

(18) かつとなる、感情のたかぶること

(19) 見るなら兎も角、そうでないならば

★「追付見せう」とキツとなる源藏の詞にかぶせて「ヲ」と力んで「早く討て」と言放つ、玄蕃は「とく切れ」と中啓をふりあげる

(20) かさにかゝつて威張ること

★源藏は松王の後を通つて玄蕃の上手へ出、その前の首桶をとり上げ「胸を」でトンと右足を踏出して二人をふり返り眉をあげて思入れをする、玄蕃がキツト腕むのを氣を挫えてトン／＼と上手障子へ入る

★玄蕃は床机に腰をかけたまま、下手から上手へ目をつける

★松王は下手に積重ねられた机を見やり

して後悔すなといはれてぐつとせき上げ、(18) 詞ヤ

アいらざる馬鹿念、病みほうけた汝が目玉がでなんぢ

んぐり返り、逆様眼で見ようはしらず、紛れも(19)

なき菅秀才の首追付見せう、おつつけ★其舌の根の乾か

ぬ内に早く討て、地とく切れと玄蕃が権柄、ハ(20)

ツト斗はかりに源藏は胸を、フシ据ゑてぞ入りにける、

傍そばに聞きゐる女房は爰ぞ大事と心も空、檢使

は四方八方に眼まなこを配くばる中にも松王、机文庫の数

を見廻し、詞ヤア合点のいかぬ、先達さきたつていんだ

★机の数が九つあったので云う  
(文樂ではないが松王首をか  
しけて考えもう一度机の方を  
見てどこに居るぞと反り身に  
なつて首をふる

(21) 寺入し入學した子がある  
と云いかけてごま化そうとし  
てうろたえた詞そこで松王が  
ギクリとなつて何馬鹿などと表  
面叱りつけ内心たしなめる

★戸浪は文庫を前に出し  
★すぐ文庫を片付け、トシノ  
と後へ退り襟を直してから兩

手をつく  
(22) やつとの事で、ごま化し  
てしまふ  
あやうく思わぬ攻撃をはずし  
てしまふ

★玄蕃は左袖を後へはねて立上  
り松王は左の太刀の鎧をトシ  
と下について兩手をかけて之  
を力に右足から弱々しく立上  
ろうとする

(23) 目の前でさあどうだく  
と厳しくせめられる  
(23) 瀬戸と海の間、危急一大

事の場  
(24) 馬が物につまずいて跳ね  
あがることよろ／＼と宙をお  
よぐ

餓鬼等は以上八人、机の数が一脚多い、其忒せがれは

どこにをるぞと、地見咎とがめられて戸浪ははつと、

詞イヤこりやけふ初めて寺イヤ寺参りした子が(21)

ござんす、何馬鹿な、ヲ、それ／＼、是が則ち

菅秀才のお机文庫と、地木地を隠した塗机、フシ

ざつとさばいて云抜ける、詞何にもせよ隙とら

すが油断のもとと、地玄蕃諸共突つ立上るこな

たは手詰命のせと際、奥にはばつたり首討つ音、(23)

はつと女房胸を抱き、フシふん込む足もけしとむ(24)

★上手障子内でエイと云う掛聲ツケが入る、松王は左に持つた太刀を落し崩れるようにトシと腕を落し兩手を前に兩腕腕にひいて極り、倒れた太刀を左手で拾つて左肩に立てかけ重い頭をたれて右手を握つて顔を軽く打つ、玄蕃もギタリとなり左足を踏み出し兩手を太刀の束頭にかけて上手へ意氣込み、戸浪は下手で胸へ抱く

★靜かに顔を打つぎけて居た松王がギクリと面をあげ、少しあわて氣味に肩に立てかけた太刀を下におき、下手向きとなり、首桶に兩手をかけると源藏が人形遣の「ヤツ」と云う掛聲諸共、その手をはねるツケが入る、手をはねられた松王はトシと上手斜に身をそむけて兩手を大きく左右に開き、右手をひざに突張り左肩をぐいと引き首を下手へひねつて眉を一杯に引上げて源藏へ氣味合と云い、源藏は右手で首桶の蓋を抑え、眉を一杯にあげて松王を睨んで極り、上手の玄蕃も左手を差添えに、右手を太刀にかけて同時に極る（ツケ）。この間床は符合せ。

内、地 武部源藏白臺に首桶乗せてしづく出で、

目通りに差置き、詞 是非に及ばず菅秀才の御首

討ち奉る、いはゞ(25)大切ない御首性根をすゑてサ

ア松王丸、しつかりと檢分せよと、地 忍びの鰐

元くつろげて、虚といはゞ切付けん実(26)といはゞ

助けんと、(27)堅唾を、呑んでひかへ居る、詞 ハ、

、、何の是數(28)に性根所か、今淨玻璃の鏡にか

け、(29)鉄札か金札か地獄極樂の境、家來衆、源藏夫

婦を取卷めされ、地 畏(30)つたと捕手の人数十手振つ

(25) 大切な首、(参照) 切ないは精切なこと

★首桶を押えた手を左手にかえ正面になり極り、差添を右手で抜とつて戸浪に渡し首桶の蓋を押えた左手を靜かに引いて太刀をとり上げ目釘をしめてたてゝもつて極る、この間松王は源藏、玄蕃、源藏と引目

(26) 忍び刀、かくし持つたる刀の齧口ゆるめて

(27) 緊張して体が固くなつた時に口中にたまるつば

★首を左から廻して性根所かワハ、ハ、ハ、と大きく面をあげて眉を一杯にあげて笑う

(28) 透明な水晶でつくつた鐘閻魔の廳で罪人の犯した罪をうつし出してはつきりと區別する

(29) 善人は金札に名を書き極樂へ、悪人は鐵札に名をかいて地獄へ送る

(30) 捕手役人の使う釣のついた鐵製の短棒

★右手をひらいて前に出し源藏の方へ上半身のり出し、地獄極樂のでツケを入れ両手を顔の前であけてから、左右にひらき、右手を右ひざに突張り左手を大きく左脇におきトン

て立ちかゝる、女房戸浪も身を固め夫は元より

一生懸命、サア実檢せよ檢分といふ一言も命が

け、後は捕手向ふは曲者玄蕃は始終眼を配り、

爰ぞ絶体絶命と思ふ内早首桶引寄せ、蓋引明け

た首は小太郎、質というたら一討と早抜きかけ

る戸浪は祈願、天道様佛神様憐給へと女の念力、

★眼力光らす松王がためつすがめつ窺見て、詞ム

ウコリヤ菅秀才の首討つたは、まがひなし相違

なしと、地いふにも恟源藏夫婦、傍きよろく

ト癒る(ツケケ)。

★ツメ人形捕手二人夫婦のうしろに十手を振り上げて立ちかゝる、玄蕃は左足を踏出して眞横を見せた立身で右手を東頭にかけて見下す

★源藏は左脇に太刀を掻挟んで意氣込む

★松王は首桶を前に引寄せて右手で蓋をとつて右におき、腰紙をとり出して切首の面を拭い、船底にすて膝を徐ろに直してから、兩手を左右にひろげ膝につき

(31) 怪しい奴、悪人、松王

ぐつと上半身をのり出して首を見つめ「松王」が身をおこし「ためつ」身体を左に傾けて眉を一杯あげて見「すがめつ」そのまゝ右に傾けて見「寝ひ見て」で正面から眉を引上げてジツと見守り、人形遣の「ヤツ」という掛聲と共に「ムウコリヤミ」と言から目をはなさずにいて「紛ひなし」と靜かに玄蕃を見上げて云い「相違なし」と面を下げてしつかり云い切る

(32) 癪めつ眇めつ、何回もく心をつけて見たり正面からだけでなく目をほそめよこからも見る

見合せり、地 檢使の玄蕃は檢分の、詞證據に

出かしたく★よく討つた、詞 褒美にはかくまう

た科赦してくれる、イザ松王丸片時へんしも早く時平

公へお目にかけん、いか様隙取つてはお咎もい

かゞ、拙者は是よりお暇賜はり、★病氣保養致し

たし、チ、役目は済すんだ、地 勝手にせよと首請

取り、玄蕃は館やかたへ松王は、フシ 駕にゆられて立帰

る、地 夫婦は門の戸ぴつしやりしめ、物をも得

いはず(1)青息吐息、五色の息を一時(2)に、フシ ほとと、

★源藏は正面へ首をまわして呆然となり戸浪は両手をついてがっかりとなるが源藏は改めて両手をついて頭をさげる

★玄蕃は立上り上手斜に向いてはれた袖を直すのを松王は首をその方へひねり眉を一杯にあけて引目して氣をゆるさず

★松王首桶の蓋をし

★頭をさげる

★首桶をかゝえて胴体を下手へ出、船底へ下りて捕手を從え

上手横幕へ入る、松王も立上り右手に太刀をもつて船底へ

おり、玄蕃の去つた方へツカ

くと進み、トシと右足を出した形で止り、右の太刀を前に斜にもつて玄蕃のあとをじつと見送り十分のウレイを身体を震わせ自然にあたまを垂れるが氣を換えて下手に向き

かわりトシと東に立ち駕籠の中に這入る

(1)心配のあまり顔色青ざめてはく溜息

(2)無量の歎息、青息より五色とたとえる

★源藏は入口の戸をしめ戸浪は上手障子の所へ立寄つて次の間の氣配を窺い、双方から真中に戻つて來てつきあたり、上手下手に入替り「御壽命は

★吹出す斗也、ほかりなり地胸撫でおろし源藏は天を拜し地

を拜し、詞ハア、有りがたや忝や、かたじけな凡人ならぬ

我君の御聖徳が顯はれて、松王めが眼が霞み若

君と見定めて帰つたは、(3)てんせい天成不思議のなす所、

御壽命は萬々年悦べ女房、詞イヤもうく、(4)大抵

の事ぢやござんせぬ、あの松王めが目の玉へ菅

丞相様がはいつてござつたが、たッ但し首が(5)黄金佛

ではなかつたか、似たというても瓦と金、こがね(6)宝の

花の御運開きとあんまり嬉しうて涙がこぼれる、

萬々威」と懐中の巻物をとり出して戸浪に見せ頂いて懐に再び入れ、戸浪と共に床の間に向つて合筆する

(3) 人力を超越した、神わざ

(4) 嬉しさは口で云えぬ

(5) 金色燦然たる佛。佛が信仰深い人間の災難の身代りに立たれる話は古澤るり以來よくある

(6) 黄金佛から極樂に咲く花を聯想し花から開くとかける下手からすつと來てくるりと後向きになりそのまゝ戸口にゆきトクくと戸をたゞきうしろを見返り又トクくとはげしく叩く

★妻を納戸へおいやり刀をうしろにかくし持つて戸をさつとあけるので千代ははずされてよろくと前に兩手をつき

地 ハア、有がたや尊たふとやと、フシ 悦びいさむ折から

に、地 小太郎★が母いきせきと、迎ひと見えて門かど

の戸たゞき、詞 寺入の子の母で御ざんす、今漸やうく

帰りましたと、地 いふ声聞くより又恟びつくり、一つ

遁れて又一つこりやマア何とどうせうと、妻が

騒さわけど夫は胴をつとすゑ、詞 コリヤ最前さいぜんいうたは爰こゝの

事、地 若君にはかへられぬ狼うろたへもの狼者ろうしやめと戸浪を引

退のけ、フシ 門★の戸ぐわらりと引明あくれば女は会釈あしやく

し、詞 コレいまあ〜お師匠様でござりますか、

(7) 腕白者、小太郎  
★源藏に禮をして上手の方を見廻す

★立上つて両手を前でかさねて源藏に挨拶をするようにして行くのをやりすごして斬りつける、千代はふり向いて身をかまし側の文庫でとめ刀を押える源藏はあげようとするのを又押える  
(8) 知られたもの、流石松王の妻だけあつて。痴者とちがう。

(7) 悪さをお頼み申します、地どこにゐやるぞお邪

魔であるにと、いふを幸ひ、詞イヤ奥に子供と

遊んで居ます、つれ立つて帰られよと眞顔でい

へば、詞★チ、そんなら連れて帰りましよと、ず

つと通るをうしろ後より只一打ひとつうちと切付くる、女もし(8)れ

者ひつぱづし逃げても逃がさぬ源藏が、刃やいばする

どに切付くるを我子の文庫ではつしとうひ請とめ、

詞コレ待つた待たんせこりやどうぢやと、地刃はね刎

る刃も用捨なく又切付くる文庫は二つふた、中なかより

(9) 死者に着せる白帷子  
(10) 法要の時寺に立てる細長  
いきれ、

★源藏は驚いて刀を上手にふりあげた形で千代の方を見込み千代は下手に倒れ上半身をあふむけ右手をうしろにつけて上手の源藏を見て兩人引つぱりの見得

松王、伊達羽織に茶金の野袴をはき、頭巾に面を包み下手横幕から足早に現われ、止つて下手をふり返り、すぐ向うへ廻つて後向の見得で、もう一度下手を窺い本手へ上つて左手を入口の柱にかけて内の標子を窺う

★刀をうしろにたくしてきまる  
(11) 納得すくか

★左手を及の先に添え極る  
(12) 源順の「梅は飛び櫻は枯る」菅原や深くぞ頼む神の誓をに下る。梅は飛ぶ傳説は天拜山の段に梅王を九州で活動させ、櫻は枯るゝで櫻丸を切腹させ、何とて松王一人ならんでどうして松王一人だけが不忠であらうぞとかける

ばらりと(9) きやうかたびら経帷子、南無阿彌陀佛の六字の幡(10) はたからば顯れ

出でしはコハいかにと、不思議の思ひに劔つるぎもな

まり、★地すゝみ兼かねてぞ見えにける、小太郎が母

涙ながら、詞若君菅秀才のお身がはり、お役に

立てて下さつたか、地まだか様子が聞きたいと

いふに恟びつろくり、詞★シテくそれは得心(11)か、得心な

りやこそ、此経帷子きやうかたびら六字の幡はた、ムウして其許そこもとは

何人の御内證と、地尋る内に門口より、詞梅は(12)

飛び、櫻はかるゝ世の中に、何とて松のつれな

★頭巾をとり屋台に這入つて一

女房悦べと見下ろし下手向きになつて外を窺い戸をしめて「立つたぞ」とトンと右足をふみ左足をあげてトンとおろし眉をあげて少しくウレイを見せて極る

(13)むせかえつて泣く

★上手へ松王が行こうとする上手の源藏がトンと左足をふみ出して意氣込み、氣味合となる。

松王はふみ出した右足を引き千代の向うを廻つて上手へ直り又源藏が右足をふみ出して意氣込むのを千代がとめる、松王は兩刀を源藏の前に投げ出し平伏するので源藏も坐つて左手の太刀の柄頭に右手を

かけてトンくと極る  
(14)夢を見ているのかそれとも現實なのかそれではこの二人は夫婦だったのかと  
(15)挨拶はあとで改めてするとして

★体を起し

かるらん、女房悦べ、世忰<sup>せがれ</sup>はお役に立つたぞと、

地 聞くよりわつと<sup>(13)</sup>せき上げて、前後不覺<sup>ふかく</sup>に

取乱す、地 ヤア未練者めと呵付け<sup>しかりつ</sup>、ずつと通る

は松王丸、見るに夫婦は二度恠<sup>びつく</sup>り、夢<sup>(14)</sup>か現<sup>うつ</sup>か夫

婦かと、<sup>フシ</sup>あきれ 軻<sup>あきれ</sup>て、詞もなかりしが、地 武部源藏

威儀を正し、<sup>(15)</sup>一礼は先づ跡の事、是迄敵と思

ひし松王打つて変つた所存はいかにいぶかしさ

よと尋ぬれば、<sup>★</sup>ヲ、御不審尤<sup>もつと</sup>も、存知の通り我

々兄弟三人は、めい<sup>な</sup>く<sup>さけ</sup>に別れて奉公、情なや

★右手を出して眺め左手を出して眺め

★考えて「や爰ぞ御恩を……」で

右手でトンとひさを打ち

★うれいとなり真中に泣き沈んで

いる千代をじつと見やつて

面をふせ

★身体を起して羽織の右裾を拂

つて右ひさをすゝめ左の裾を

はらつて左ひさをすゝめうれ

いで靜かに面をふせやがて身

体を起して下手の机を見やり

(16)めどは占いの算木、心で

占う、推そくする

(17)不人情、薄情、何とてつ

れなかるらんと菅公は反語に

世間は推量にとる

★せつなくクリズして膝を直し

て正面となり、正面を右手で

さし「口惜しさ」で右手を膝

に突張つて眉を引上げてじつ

と堪えそのまゝ面をふせ。

★源藏をじつと見やつて兩手を

重ねて上から一膝づゝにじ

りより、上半身をのり出して

首を右からまわして來てうな

★此松王は、時平公に隨ひ、親兄弟共肉縁切り、

御恩請けた丞相様へ敵対、主命とは云ひながら

皆是此身の因果、何とぞ主従の縁切らんと、作

病構へ暇の願ひ、菅秀才の首見たらば暇やらん

と今日の役目、よもや貴殿が討ちはせまい、な

れ共身がはりに立つべき一子なくばいかゞせん、

爰ぞ御恩報ずる時と、女房千代と言合せ、二人

の中の世忤をば、★先へ廻して此身がはり、詞

机の数を改めしも、我子は來たかと心の耆、菅

だれ身体をおこして正面とな  
り泣いている千代を見やつて  
目があるのでトンと上手に体  
をそむけ泣上けてうなだれる  
(18)人非人、人の道をわきま  
えぬ奴

★襖紙を顔にあてて泣き

(19)あの世、墓場  
★体をふるわせてなき／＼三度  
目に手拭を口に泣伏すので松

王丸もうなだれる  
(20)「申しつけてはおこした  
れど」とあとにあるので身代

りになつて死ぬことは知つて  
いる筈であるがいよ／＼今こ

ゝで別れたらこれが今生の別  
れ、寺子屋へ入學でなくあの

世への旅立と豫感したのであ  
る

★千代はトントンと松王のひざ  
にとりつき、夫をみあげ泣き

泣くのでギツクリとなり顔を  
仰向けて、眉をあげウレイで

身体をふるわすうなだれる  
(21)もどつて来ました

★下手に向き直り、目をおささ  
え

く／＼戸浪のそばにより  
★両袖をひろげて中腰になりそ

のまま胸をだきしめるように  
泣きくずれる

(22)中陰満了の日、四十九日  
の間はまだこの世に魂がのこ

丞相には我性根を見込給ひ、何とて松の つれな

からうぞとの御歌を 松はつれないくと、世上

の口にかゝる悔しさ、<sup>地</sup>推量あれ源藏殿、<sup>せがれ</sup>世忤

がなくばいつ迄も <sup>(18)</sup>人でなしといはれんに、持つ

べき物は子なるぞやと、いふに女房猶せき上げ、

<sup>(19)</sup>草葉のかげで小太郎が聞いて嬉しう思ひましよ、

詞 持つべき物は子成るとはあの子が爲によい手<sup>★</sup>

向、<sup>むび</sup>思へば最前別れた時、いつにない跡追うた

を <sup>しか</sup>呵つた時の其の悲しさ、<sup>(20)</sup>冥途の旅へ寺入と早

つてゐるがこの日すぎるとあの世に生れ代るのでこの日佛事をいとなみ饅頭などのくばりものをする

★六字の旗をとりあげて松王に見せ自分の胸にだきしめて泣く

(23) 土佐日記以来の俗諺

(24) 子供の大疫の抱瘡までかゝつてそれ無事すみ親をほつとさせたのに

★右ひさを前に夫を見上げそのまゝそむけて体をひねつて美しい姿を見せ顔をおさえて泣き入る。松王は面を伏せたまゝ、動かない

★松王は身体をおこして首をひねつてから改めて戸浪の方へ向き直り右手でとめ前に挿んだ扇子をぬきとりひさにおき(25) 聲をあげて泣くこと

★首を鋭くふつて左前から横一文字に千代の方へ扇子をもつた手を一杯に伸すと左肩をひき反身になつて呵る。床待合せで千代はすねて上手へ進み上手斜向きに両手をひさにおいてトクときまりツンとす。松王は羽織の裾をはらつて源藏の方へひさをすゝめ半は開いた扇子の手を前に寄せ、閉じたり開いたりして

虫がしらせせたか、隣村へ行くというて、道迄い

んで見たたれ共、子を殺さしにおこして置いて、

★ どうマア内へいなるゝ物ぞ、死顔成共 今一度見

たさに末練と、<sup>地</sup>笑うて下さんすな、包みし祝

儀はあの子が香奠、<sup>星</sup>四十九日の蒸物迄持つて寺

入さすといふ、悲しい事が世に有らうか育ちも

生れも賤しくば、<sup>星</sup>殺す心も有るまいに、<sup>星</sup>死ぬる

子は媚<sup>みめ</sup>よしと美しう生れたが、可愛や其身の不

仕合せ、何の因果で<sup>(24)</sup>瘡瘡迄、仕舞うた事ぢやと

★上半身を前に傾けて首を左からまわしてくる、千代ものびるようにしてきく

★思わず松玉扇子を持った手をあげ、同時に膝を直して両手で扇子をとって源蔵の方へ膝をすゝめ上半身を一杯のウレイでゆり動かす

★源蔵がうなだれるので、思わず「ウ、」と身体を起して扇子をつき出し、スツと上手斜に身体をそむけてパラリと扇を開いて源蔵に顔をかくし「ウハ、ハ、ハ」と泣き笑いとなり「アハ、ハ、ハ」と扇を一杯にあげて段々涙混じりになるので涙をのみ込まうとして「カ、」となる時思わず扇子が手からはなれて船底におちるので我に返り、源蔵を憐れて氣をかえ上手に体をそむけて今度は力なく「ワハ、ハ、ハ」と扇をあげウレイ一杯の泣き笑い、鼻をすゝつて懐紙で目をふきふところにしてしまつて

★せき上げてかつぱと、フシ伏して泣きければ、地

俱ともに悲しむ戸浪は立寄り、詞 最前にナ、つれあひ 連合の

身がはりと思ひ付いた傍へ行て、お師匠様今から頼上げますと、いうた時の事思ひ出せば、他た

人にんのわしさへ骨身が碎くだける、地 親御の身ではお

道理と涙そめ添れば、★イヤこれ御内證、詞 コリヤ女房

も何でほ(25)える、覚悟した御身がはり、内で存分

ほえたでないか、御★夫婦の手前も有る、イヤ何なに

源藏殿、申付けてはおこしたれ共、定めて最期の

(26) けなげな奴のやつから地にして九つとかける

★身体をおこして右手で正面向うをさし「先立ちし」でうなだれ「草葉の…」で腰を浮かして向うを見「けなりかろ」と一杯のウレイで体をゆすつておいて堪え

(27) ねたましい、羨しい

★左ひざで當つて正面となり又右ひざで當り上手斜になり顔を正面へまわして來てから泣き上げて面をふせる

(28) 同じ氣もちをもつた兄弟のこと

松王の膝にとりつくが、松王は首をたれたまゝ、身体をふるわせて堪える

★上手屋台から出る、千代はみへさがつて千代と共に兩手を

節、未練な死を致したで御ざらう、いや若君菅

秀才の御身がはりと云聞したれば、いさぎよう

首差のべ、アノ逃隠れも致さずにナ、につこり

と笑うて、ム、ム、ム、でかしをりました、利口な

やつ立派なやつ、健氣な、地、八つや九つで親に

かはつて、恩送り、お役に立つは孝行者、手柄者と

思ふから、思ひ出すは櫻丸、御恩も送らず先達

し嘸や草葉のかけよりも、羨しかろけなりかろ、

世忤が事を思ふに付け思ひ出さる、くくと、流

★尾台の外に出て下手横幕に向いて云う

★ツメの人形かいて出るので松王は膝を折つて扉をひらくと御台がかごから出て屋台に入る、松王もこれに次いで入る(29)四段目北嵯峨御台所隠れ家の段にあり

★右の手首を手前へよせて眺め同じく左の手首を寄せて眺める

★羽織の紐へ両手をかけて衣服を着更える心を見せて立上り千代の「アイ」と答える間にツギ足の足取りで靜かに向うへ廻つて納戸へ入る、千代もつゞいて入る

(30)葬式

(31)御台所のつて来たかご★のれんをあけて出る松王白無垢麻上下、右に白い數珠をさげ正面に出る千代も同じく白無垢、綿帽子數珠をさげ松王の下手源藏夫婦の中間に坐る

(33)死装束  
(33)子が親の葬禮をするのが普通、親が子の葬禮をするのは逆縁であり、又死んだ子供が親をしたつて魂がうかばれぬと云われる  
(34)葬式婚禮の時に門口で焚く火。再びもどつて來ぬ爲

石同腹同性を、スエテ忘れ兼ねたる悲歎の涙、詞な

う其伯父御に小太郎が、地あ逢ひますわいのと取

付いて、スエテわつと斗ばかりに、泣沈む、歎なげきも洩もれて菅

秀才一★間の内より立出給ひ、我にかはると知る

ならば、此悲しみはさすまいに、可愛の者やと御

袖をしぼり給へば夫婦ははつと、俱ともにひたする、(29)

フシ有がた涙、地次手ついでながら若君様へ御土産おみやげと松

王つつ立ち、★申付けた用意の乗物早くくと呼

はるにぞ、ハツト答へて家來共、フシ御目通かきに昇

★千代が立上つて屋台を出船區におりかこの前に跪いて扉をひらき小太郎の死がいを見て最後の別れを惜んで扉を閉じ後へ退つて數珠で兩肩を拂つて合掌する

この間に源藏は納戸から藥束をもち戸浪は手燭をもつて出て居体の下手で門火を焚くチンくくくチン、チンのかゝりで千代は立上り、下手に心を残して上手へ、手をかされて少し腰を屈め氣味にさげ乍ら中央まできて坐り辭儀をする

★立上つて腰をかゝめて少し退り、下手むき「寺入の」で左手を左につけて右手でかごをさし逆に右手を右につけて左手でかごをさし

★合掌し

★「六道能化の」で右ひざ立て又左ひざ立てて左手でかごをさし「さいの川原で」左手の筆を右手先でさらく書き下手ふり返つて立上り「い」(チリガン、シヤン)と兩袖を使つて上手に右、左とさがり「は……書く子の」正面となり「あへ……」(チン、チン)で兩袖を口にして「なく……」(チンくく)トんと足拍子

据<sup>すめ</sup>る、<sup>地</sup>早御出でと戸を開<sup>ひら</sup>けば普丞相の御台所、

ノウ母様か我子かと御親<sup>しんし</sup>子ふしぎの御対面、源

藏夫婦横手を打ち、<sup>詞</sup>方々と御行衛尋ねしに、

いづくにが御座なされし、サレバく<sup>(29)</sup>北嵯峨の

御隱<sup>かくれが</sup>家、時平の家來が聞き出し召捕<sup>めしとり</sup>に向ふと聞

き、<sup>★それがし</sup>某山伏の姿と成り危<sup>あやふ</sup>い所奪取<sup>うばひとつ</sup>たり、<sup>地</sup>急ぎ

河内の國へ御供なされ、姫君にも御対面 コリヤ

く女房、<sup>詞</sup>小太郎が死骸<sup>しがい</sup>あの乗物へ移し入れ、

<sup>(30)</sup>★野辺の送り<sup>いとな</sup>営まん、<sup>地</sup>アイと返事の其中<sup>うち</sup>に戸浪

を入れて、「ウ、く、く」(チンチン)でトン、く、く(と乗って行つて)「も、く、く」(チンチン)細く刻んで上手へ進み「ちりぬる命」でトンを止まり身体を返り見て、氣を換へ正面に身を返り、「是非もなや」と兩袖を口に「是非もなや」と眼をおとし顔を抑えなき沈む右手を前に出してうしろへやり左手を前に出してうしろへやりか、えをしめるように美しく体をくねらせて右ひざをたてて兩手をその上におき、「添乳せん」で人形遣はカツと泣き聲をかぶせて「らむ鼻目見る」トんと左足を上手へふみ出して上手向となり兩袖を左右に展げると同時に右ひざをあげて正面にふり返り、片手後の見得となつて左手の方から見物席の方へ顔を見せ「親心」で泣きくずれる。又松王もかこの前で合掌し「親心」で千代の方へレイでふり返り泣き上げる。チチチン、チンチンツレン、く、の間に千代はトン、く、く、と横におかれた六字の旗をとつて真中にもどると「剣と死出の山げこえ」となつて下手から近寄つた松王と向き向いと

が心得抱だいてくる、死骸を(31)あじろの乗物へ、乗

せて夫婦が上着を取れば、哀や内より覚悟の用意、

下(32)に白無垢麻上下、地心を察して源藏夫婦、

野辺(33)の送りに親の身で子を送る法はなし、

地我々夫婦がかはらんと立寄れば松王丸、詞イ

やく、是は我子にあらず、菅秀才の亡骸(なきがら)を御供

申す、地いづれもは門火(34)くと門火(34)を、フシ頼み

頼まる、地御台若君諸共にしやくり上げたる

御涙、めいどの旅へ寺入の、師匠は彌陀佛釈迦

なり(チウチン、チチチン、チレチンチ)で互に左右に交わして入れ替り「あさき夢見し心地して」千代は下手から六字の旗を見せて見上げるので松王はそれを見下ろしてギツクリとなり百日臺をこまかく震わし、「跡オ、はア、ハ、ハ、」でトンと左足で足拍子を入れて、右ひざをあげて一杯にあけてジツト見下ろし右足をトンと下すと共に見上げる千代と一語にチツチツチツチリツチツチにのつてトン／＼と足拍子を入れて乍らよつて来て、とゞ腰のあたりにとりつかれて面を伏せる、「門火に」で千代は六字の嘴をかごにかけ「京は故郷」で戻つて来た千代が寄るともなから松王により添うので双方から徐ろに顔を見合せ「鳥邊野」でトンと上手斜になり下手の千代を見返ると千代はうしろ向きになつて泣伏す。戸内では御台が菅秀才の手をとつて泣き下手で源藏はうなだれ戸浪はかごの前で合筆して幕(昭和十八年一月榮三、文五郎の松王千代大西重孝の記録を中心に書く)

牟尼佛、<sup>(35)</sup>六道能化<sup>のうひ</sup>の弟子に成り賽<sup>さい</sup>の川原で砂手

本、<sup>(36)</sup>いろは書く子をあへなくも、ちりぬる命、

フシぜひもなや、あすの夜たれか添乳<sup>そへち</sup>せん、<sup>(37)</sup>らむ

うめめ見る親心、<sup>(38)</sup>劔と死出<sup>(39)</sup>のやまけこえ、<sup>(40)</sup>合あ

さき夢見し心地して跡は、門火<sup>(40)</sup>にゑひもせず、

京は故郷と立別れ鳥邊野、さして連れ帰る、

(35) 人間、天上、餓鬼、畜生、修羅、地獄に迷うものを教化する地藏菩薩

(36) 宗輔作「藤原秀卿儀系圖」一「賢女の手本我がいろは、ちりぬる体をかきいだき、見送る夫の契りはあさき、ゆめみしこゝち立酒にゑひもせず京都路に母と妹は立隔る」

(37) 昔のいろはは、らむうめと續く。

(38) 劔の山(劔林地獄)と死出の山

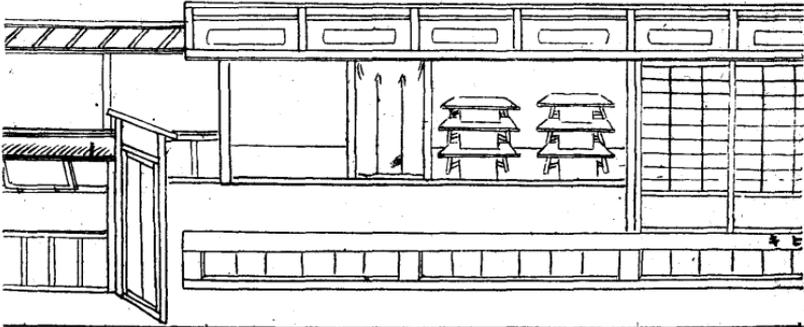
(39) いろはは今日では有爲の奥山今日越えて

(40) 門火を焚いてもうすつかり悪夢もさめ

| カシラ              | 役名         | 臺                 | 肩          | カシラの<br>塗色 | 備考   | 衣<br>裝  |
|------------------|------------|-------------------|------------|------------|--|---|
| 男の子役             | 手習子        | がつそのとんぼ<br>蛇の目、其他 | 描き肩        | 白薄卵        | 六個を用う  | 木綿後紐の着付、胴着に赤襟<br>(前)黒紋斗目着付、胸黄金の帯<br>(後)白縮子の着付、胴着に赤襟、赤地金鬼衣、<br>八藤の指貫袴<br>木綿立縮着付、小倉帯、胴着に黒襟、<br>藍色石持、浅黄襟、黒縮子帯<br>立縮木綿の着付 |
| 丁                | 雅<br>よだれくり | 蛇の目とんぼ<br>五つぐくり   | 〃          | 薄卵         | 馬頭のもの  |   |
| 老け女形             | 女房 戸浪      | 油付 勝山             | 青眉         | 白          |  |   |
| 端役の三枚目           | 下男 三助      | 地毛のひつくり           | 描き肩        | 薄卵         |  |   |
| 老け女形             | 女房 千代      | 油付 忌中髻            | 青眉         | 白          | いろは送りは縮<br>嶋子付、老け女<br>形二個を用う                     | (前)黒縮緬、茶金の帯<br>(後)白無垢、白帯  |
| 男の子役             | 一子小太郎      | 蛇の目とんぼ            | 描き肩        | 白          |  | 水浅黄髪目中振袖、胴着に赤襟同じく羽織袴縮<br>(前)黒羽二重羽織、博多袴<br>(後)茶色羽二重、胴着に黒襟、黒帯   |
| アオチとネムリの<br>檢非遣使 | 武部源藏       | 油付 武士髻            | 動きの<br>アオチ | 白          |  | 萌黄の織物着付、胴着に摺襟、茶襦子の大紋  |
| 金時               | 春藤玄蕃       | 油付、切薬、<br>萬才烏帽子付  | 描き肩        | 卵          |  | (前)黒豹松裏付、同じく羽織、白地織物の巾着帯<br>(次)黒羽二重着付、胴着に白襟、同じく黒二重伊<br>達羽織   |
| 文七               | 松王丸        | 櫛洗、油付百日<br>茶釜の前はら | 動きの<br>フキ肩 | 白          | 首實檢は熨斗紙<br>病鉢巻付、後は<br>黒頭布付及、いろ<br>は送り文七三個<br>を用う | (奥)白着付、胴着に白襟、卵色麻無地袴<br>浅黄羽二重、F衣裝に黒襟   |
| 老け女形             | 御台所        | 唐毛のすつぼり<br>鬘鉢巻    | 青眉         | 白          |  | 紺金の帯、茶毘子の打掛   |
| 外に               | 奴 つめ二      |                   |            |            |  |   |
|                  | 百姓つめ七      |                   |            |            |  |   |
|                  | 捕手つめ二      |                   |            |            |  |   |

# 舞台装置

これは明治十七年九月（此時より御靈社内新築文樂座に移り興行）竹本越路太夫（後の竹本攝津大掾）上演の時の道具帳より複寫



## 文樂人形小道具帳

|    |    |    |     |       |    |    |       |      |     |    |       |    |      |     |    |    |    |    |    |
|----|----|----|-----|-------|----|----|-------|------|-----|----|-------|----|------|-----|----|----|----|----|----|
| 机  | 双紙 | 硯箱 | かるこ | さかい珠敷 | 文庫 | 机  | へぎに祝儀 | 六字の旗 | 經帷子 | 手本 | ほうすの繪 | 首桶 | 子供切首 | のり物 | 神棚 | 卷物 | 門火 | 燭  |    |
| 四つ | 四つ | 四つ | 一荷  | 一つ    | 一つ | 一つ | 一枚    | 一つ   | 一枚  | 四つ | 一枚    | 一つ | 一つ   | 一つ  | 一つ | 一つ | 一つ | 一つ | 一つ |

|                       |                  |                            |                  |                       |                       |                       |                  |                            |                  |                  |             |                       |                  |                            |
|-----------------------|------------------|----------------------------|------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|------------------|----------------------------|------------------|------------------|-------------|-----------------------|------------------|----------------------------|
| 新<br>口<br>村           | 攝<br>屋           | 重<br>の<br>井<br>子<br>別<br>れ | 辨<br>慶<br>上<br>使 | 十<br>郎<br>兵<br>衛<br>内 | 長<br>局                | 帶<br>屋                | 山<br>科           | 勤<br>平<br>切<br>腹           | ■<br>尼<br>ヶ<br>崎 | 油<br>屋           | 沼<br>津      | 妹<br>山<br>、<br>背<br>山 | 陣<br>屋           | ■<br>整<br>坂<br>寺<br>の<br>段 |
| 壽<br>し<br>屋           | 將<br>監<br>閑<br>居 | 御<br>殿                     | 十<br>種<br>香      | 引<br>窓                | 逆<br>樽                | 酒<br>屋                | 澤<br>市<br>内      | 堀<br>川<br>猿<br>廻<br>し      | 合<br>邦<br>住<br>家 | ■<br>寺<br>子<br>屋 | 宿<br>屋      | 野<br>崎<br>村           | 紙<br>屋<br>内      | 河<br>庄                     |
| 平<br>太<br>郎<br>住<br>家 | 鰻<br>谷           | 淺<br>町                     | 白<br>木<br>屋      | 袖<br>萩<br>祭<br>文      | 吉<br>田<br>屋           | 九<br>郎<br>助<br>住<br>家 | 彌<br>作<br>鐵<br>腹 | 三<br>浦<br>之<br>助<br>別<br>れ | 大<br>文<br>字<br>屋 | 扇<br>ヶ<br>谷      | 岡<br>崎      | 金<br>殿                | 盛<br>綱<br>陣<br>屋 | 葛<br>の<br>葉<br>子<br>別<br>れ |
| 二<br>月<br>堂           | 道<br>明<br>寺      | 封<br>印<br>切                | 日<br>向<br>島      | 橋<br>本                | 小<br>牧<br>山<br>城<br>中 | 六<br>助<br>住<br>家      | 雲<br>黃           | 正<br>清<br>本<br>城           | 阿<br>彌<br>陀<br>寺 | 志<br>渡<br>寺      | 長<br>町<br>裏 | 喜<br>内<br>住<br>家      | 道<br>春<br>館      | 阿<br>古<br>屋<br>琴<br>賣      |

第一期刊行

第二期刊行

刊既ハ印

昭和二十七年四月五日印刷  
昭和二十七年四月九日發行



文樂叢書 第三編  
菅原傳授手習鑑寺子屋  
定價五十円

編 集 文 樂 愛 好 會

印刷者 大阪市東區高麗橋五丁目  
株式會社 萬 年 社

發行人 石 井 常 彦

發行所 大阪四ツ橋文樂座内  
文 樂 愛 好 會

電 用 (75) 二〇八二・二〇九二番  
振替口座大阪二一五二六二番

# 文樂人形かしら、

## 人形衣裳

御好みに應じ調製いたします

○浮世繪、陶器其他趣味品

○文樂、歌舞伎の古本

大阪市北區梅田新道

交叉點北東角

バス停前

美術の店  
**リ  
ー  
チ**

電掘川 (35) 六九八六

浄瑠璃本・文樂・芝居もの

古本 誠実賣買

# 天牛書店

千日前電停前・天牛新人郎

橋畔賣茶二百年



本店  
西區御池橋畔

大阪驛店  
專門大店